

---

# まさかの転生物語

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まさかの転生物語

### 【Zコード】

Z8690X

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

犯罪に巻き込まれ、大事なものを守るために  
自らを犠牲にし、死んだ主人公。

天命より前に命を落としたため、  
彼女はこの世界への転生が叶わなかつた。

そうして転生したのは、異世界。

……………ドラゴンに転生したようです。

大きなドリームであるお父さんやお母さん、

お兄ちゃん、お姉ちゃんに囲まれて、

まだまだ小さなドリームの主人公は突き進みます。

なお、残酷描写は保険です。

最初のほうは残酷描写を出すつもりはないですが、

おそらく、途中から出でてきますので。

## あの日を懐かし（前書き）

すつゝい気まぐれに書いてみました。

人外生物が主人公の連載小説書いてみたかったんですね。

## あの日を想ひ

守らなくては。この子達だけは、守らなければ。  
私はどうなつてもいい。死んだつてかまわない。  
だけど。だけどこの子達だけは……。

だから、逃げなさい。私のことなんて放つておいて。  
早く、安全な場所まで行きなさい。絶対に振り向かないで。  
イヤホンをはめて、まわりの音が何も聞こえないように。  
聞いてはいけない。聞いたら狂つてしまふかもしねれない。  
だから、何も聞かずに逃げなさい。

そして、ここには戻つてくるな。

私は、あなたたちさえ無事ならばそれでいい。あなたたちさえ日常に戻ることが出来たなら。

ねえ、どうして戻つてきたの？ どうして泣いているの？  
暗闇の中での、ふと思ひ。

あの子達が泣いている。悲しそうに、辛そうに。

泣かないで。

重たい腕を必死で動かす。重たい瞼を必死で持ち上げる。  
そして、口を動かす。

「…………」「、泣いて……の、ちびっ」「…………」

「つー 姉ちゃん！」

「えー？ 姉ちゃんーー！」

「こーの、泣き虫……おちび……ズガ……」

「ちび、じゃないもん！」

おいおい、泣かないで欲しいのに、どんどんと涙が溢れてるよ。  
これは、動かしづらい私の手じゃ、拭いきれないな。

「い……から、泣くな……。……げる……」

泣かないで早く逃げて。早く、安全なところへ。

私は放つておいてかまわない。だから、早く逃げなさい。

「逃げない！ お巡りさん、こらもんっ！ も、すぐ、救急車も、  
来るからー！」

「は、犯人も、捕まつた、よー！」

そか、この子達は大丈夫だね、警察がいるのなら。  
でもね、おちびーズ、救急車は多分、無駄だよ。私は多分助から  
ない。

致命傷を負うと痛みを感じないって本当なんだって、今実感して  
る。

痛みを感じない。体の感覚が何も、何もないんだ。

分かるのは、傷口からどんどんと血が流れていく感覚、どんどん  
と体から熱が消えていく感覚だけ。

「な……くな……て……。寧ろ……笑え？」

ねえ、だから最期に笑顔を見せて？ この世に、あなたたちの笑  
顔を焼きついて逝かせて？

ああ、可愛い私の従妹たち。泣かないで、嘆かないで。

21年の人生は、良いものではなかつたけれど、私は幸せだよ？

だって、可愛いあなたたちを守れた。私が、あなたたちの未来を繋いだ。

私自身の未来はどうでもいい、どうせ死にたかつたんだから。だけど、あなたたちの未来だけは、守りたかつたんだ。

だからね、私は不幸じゃないんだよ？

ああ、目の前が少しづつ暗くなつていく。音も遠くなつっていく。あの子達が泣いてる。ずっと、ずっと泣いてる。

だけど、私の臉に焼き付いているのは、最期に見た、あの笑顔。涙を流しながら、それでも私の要望に応えて微笑んだ、あの笑み。

もう、何も見えない、何も聞こえない。

深い闇に、墮ちた。

ようこそ死の世界へー！　目を覚ましてすぐにかけられた言葉は、これでした。

死の世界。つまり私は死んだ、と。まあ、それもそうか。あれだけ殴られ、刺され、斬られつてすれば死ぬだろうね。でも、目を瞑れば見える、あの子達の笑顔。涙を堪えて必死に微笑んだ愛らしい姿。

そんな、可愛いあの子達を守ることが出来たのだからよしとしよう、うん。

まあ、とりあえず。私は近くにいた人を捕獲し、声をかけた。

「とりあえず、いろいろと説明が欲しいです」  
「はいはーい！　じゃ、簡単に説明していきますねー！」

まず、ここには先ほど言ったように死の世界、死した人の集まる世界です。

普通は、天命に従い、人はこの地を訪れます。ですが、たまに天命に逆らい死した人がいるんですよ。

あなたのように。

普通、天命を果たし死した人々は、しばらくこの地で過ごし、輪廻の輪に戻っていきます。

ですが、あなたたちのように天命を果たさずに死した人たちは違います。

天命を待たずに死した人たちは、この世界に転生することが出来ない。

ですが、天命を待たずに死した人たちの中には、あなたのように望まずして死した人、あなたたちのような人たちもいますし、自ら死を選んだ人もいます。

その人たちを、みんな一緒に考えるのはいきません。

ですから、あなたたちのように望まずしてこの世界に来た人たちには、しばらく魂を癒してもらい、異世界に転生してもらいます。その際は、我々が絶対に幸せな生活になると保障し、そしてお助けしましょう。

だから、あなたはしばらくお休みなさい。

今はただ、その魂を回復させるために、眠りなさい。

三覚のは最悪です（前書き）

トランジスタの構造と動作

## 目覚めは最悪です

真っ暗。全部真っ暗。

その中に、ひびが入ったように、光が射す。  
何だろ、そう思いながらもどんどんと襲ってくる睡魔に身を委ねる。

おそらく、まだ魂が回復していないのだろう、そう思いながらおぞらく。

だが、その眠りは長くは続かなかつた。

次にぼんやりと目を覚ますと、先ほどよりも見える光が大きくなつている。

これは何で。

とりあえず、触つてみた。硬いようで、硬くなさそうで……。

これつて、叩いたりすれば割れて、もっと光が入るんじゃね？  
そう思いながら、少しづつソレを叩く。

お、お！ 予想通り、少しづつそれは割れて、徐々に光が射し込んで来た。

それはいいけど、眩しいな。

そうやってじぱりく叩いて、やつとソレは完全に割れ、空が見えた。

えつと、視界に大きく口を開くドラゴンが見えるんだけど、気のせいかな？

私、食べられる？ え？ もつお終い？ 早くね？

そう思つてみると、大きく口を開いていたドラゴンは、私の顔を

舐めて来た。

「ひぎやーっ……」

可愛くない声ですみませんね、これが地です。

とりあえず、これが夢落ちだと祈つて、今は眠ることにします。  
。

うん、夢落ちじゃなかつたよ。でも、今はそのドラゴンも人の姿を取つています。

目の前でドラゴンから人になられては、夢じやないと信じざるを得なかつた。とりあえず、何て言つてるかは全然分からいけどね。そして、何となく実感。私は人間ではなく、ドラゴンに転生したようです。

まだ全身をしつかり見てないから分からいが、鱗に包まれた体や、鋭い爪、そして両親であろう一人の大きなドラゴンを見れば、自分もドラゴンだと何となく予想は出来るものです。

それにしても、この世界のドラゴン、つていうか私小さいな！  
ドラゴンの子供が単純に小さいだけか？ 父や母であろうドラゴンは大きかつたしね。

私の普段の生活場所は、この広大な山の中、の母であるうのドラゴンの人態を取つたときの頭の上だ。

まあ、ふあふあしてて、暖かくて気持ち良いんだけどさー。

まだ、この人たちが何て言つてるか全然分からいし。

でも、たくさん愛情が注がれていることだけは分かる。だって、二人とも私を見る目はいつも優しくて、私を見るときはいつも笑顔だから。

まあ、今そんなことを考えていたって何も始まらない。とりあえず、眠たいから寝よ。

## 転生を認めました

4歳になりました。最近、やつとお父ちゃんの言ひ方こねりが理解できるようになつて来ました。

だけど、まだ全然話すこと出来ません。何を言おうとしても、「ひぎゃー」や、「あやねー」とか、「きゅねー」としか発音をれないのです。

「へしゃー！」

あ、体はあんまり大きくなつてないよ？ だつて、まだお母さん  
の頭の上で暮らしているもん。殆ど。

「エーデルフィア、今日は山頂に行つてみる？」

「えむーー！」

行くー！ 本当はそつ答えたいのだが、やはつまともな発音はされなかつたか……。そろそろ普通に話がしたい……。

あ、エーデルフィアってのは私の名前みたいだよ。言葉も理解できなかつた頃から、ずっとこの言葉は発せられてたからね。

「えむー、えむーるるるー！」

「わうんなに山頂が楽しみ？ エーデルフィアは可愛い子ね！」

「うん、楽しみだよ。だつて、山頂からはじの山がきれいに見渡せるもの。

そうして到着した山頂。そこでは早速私が思い切り叫んでいた。  
やつはーー！」

「 もゆ るー つ ……」

あつはつは、やつぱつこんな感じにしかならないか。でも、私の下でお母さんは面白そうに笑っていたよ。

「 ハーテルフィアつたら、元氣いつぱい」

「 もゆ る、もや るるー」

だつて、山が見渡せるから楽しいもん！ そうしてみると、私たちのいる場所に、一匹のドラゴンが飛んできた。  
大きな青色のドラゴン。あれ、お兄ちゃんらしいです。

「 母さん、ハーテルフィア」

「 サーファイルス。よくここが分かつたわね」

「 ハーテルフィアの声が聞こえたからね。ハーテルフィア、母さん  
に隠れてないで、姿を見せておくれ？」

つて言つてもね、お兄ちゃんのドラゴンの姿、大きすぎて怖いんだ。大体、人態でも十分私から見れば大きいのに。  
だからせめて、人態を取つて？ 怖いよう怖いよ。

「 もゆー、もゆ るう」

「 あれ？ 僕、怯えられてる？ 何で？ 何で？ ハーテルフィア、  
俺、怖くないって」

「 ……ドラゴンの姿が怖いんじゃない？ あまりにも大きいから。  
私たちも、ドラゴンの姿をとつたら大体避けられるからね」

うん、確かにお父さんもお母さんも、ドラゴンの姿をとつたらまづ、逃げます。だつて大きすぎて怖いもん。

私、まだまだまだ小さいんだよ？ お母さんの髪に隠れられ

るせび小せいんだよ？

その状態で、普通のドラゴンのカタチのお父さんやお母さんは怖いに決まってるでしょう？ 踏み潰されそ�で。

「えっと、これでいいの？」

お兄ちゃんはもう三つと、ドラゴンから人間へと姿を変えた。うん、それならオッケーです。

「あむる」

「ヒー・デルフィア！ ああ、相変わらず小さくて可愛い！」

「あむる、あむるあむるー」

お兄ちゃん。小さな体で羽を広げ、パタパタと飛んでお兄ちゃんの頭に移動する。お兄ちゃんの髪、短くてつんつんだから、お母さんの髪に隠れてるときほど気持ちよくないんだよね。  
でも、優しいお兄ちゃんだから好きだよー。

ちなみに、お兄ちゃんの見た目年齢は、大体高校生くらい。実年齢は知らない。教えてもらえないし、まともに話せない今は聞けない。

でもまあ、どうでもいいか。みんな優しいしー？

「あむるあむるー」

お兄ちゃん大好きー。

「あー、ヒー・デルフィアは本当に可愛いいなー」

「あー、そろそろ山を下りましょつか。サーファイルス、ドラゴンに戻つて、お母さんたちを乗せて行つてくれる？ ヒー・デルフィア、

おゆれんのじいわくはまつてねこで

「阿莫諾—！—」

お兄ちゃんが大きなドラゴンに戻るのならば、今すぐに……とりあえず、お母さんの髪に隠れて、大きなドラゴンの姿を見なくて良いように丸まつておこう。

「エ、エーテルフィア……」「きゅるー」

私はお母さんのところへ戻ると、しつかりとお母さんの髪を掴み、落ちなこよひにすむ。

そして、私がしなくなると、お兄ちゃんはすぐにドテーンの姿に戻つたらしい。お母さんがその背に乗り、お兄ちゃんは飛んだ。お兄ちゃん空飛んでるよ怖いよ。お兄ちゃん大きいよ怖いよ。

それからじきまじび経たずこ、私たちがねべりである洞窟へと戻った。  
おーーさんーー！

「お? お帰り、エイシェリナ、サーファイルス、エーデルフィア」

そこには見えた田20代前半の赤髪の男。これ、お父さん。名前はフォンショベル。あ、エイショリナって言つのはお母さんの名前ね。お母さんも同じく、20代前半にしか見えない。ちなみに、髪の色は青。

「アキノ、アキノアキノー、アキノ」

私はそつやつてきゅるきゅる鳴きながらお父さんの頭へと移動する。あ、美味しいぞうなにおい。

「美味しいやうなこないだらうへ。 今日はつまに肉を手に入れたから  
な」

そう言つてお父さんが見せるのは、美味しそうなお肉を使った料理。 こんがり、いい色に焼けてるね。 美味しそうだ。  
そんな意味を込めてきゅるきゅる鳴くと、お父さんは嬉しそうに微笑んだ。

「うむ、Hーテルファイアがそう言つならば、今日の料理は中々のものだな」

「本当に美味しいやうなこない。 ね、フォンシュベル、みんなを呼んでも大丈夫？」

「ああ、みんな散らばつてるだらうが、頼んだぞ。 Hーテルファイアはどうする？ お母さんと一緒にみんなを呼びに行くか？ お父さんといるか？」

「やあ」

お父さんといる。 そう言つ意味を込めて、お父さんの髪を掻んだ。  
お父さんは微笑む。

「よし、お父さんと一緒にいるんだな。 あー、Hーテルファイアは可  
愛すがだ」

「やあ、やあ」

お父さん好きー。 ドリゴンの姿をとらなければ、ね。 とりあれ  
ず、お母さんたちが戻つて来るまではお父さんに甘えていよつゝじ。

「ん？ Hーテルファイア、羽が汚れてるぞ？ ちよつと待つてなさ  
い」

その後、自分の頭から私をとり、抱き上げたお父さんは告げる。

いつ汚れたんだろう？

それから濡らした布を持ってきたお父さんは、優しく私の羽を拭いてくれた。はわわ、気持ちいいよ……。気持ちよすぎて、寝ちゃう……。

「うーん、落ちないなあ。……洗うか?」

え！？

「中々落ちないし、汚れたままだと染み付いて取れなくなりそうだ  
から、洗おう。な？」

はい、イヤです。人間の頃はお風呂は好きだつたけど、この小さな体でお風呂はおぼれそうで怖いです！

の用意をしていたよ……。私をテーブルの上に置いて。  
少しずつ、逃げようかな。……うん、テーブルの下を見ると怖い。  
高い。でも、逃げなくちゃ……。

落ちた。うまく羽を広げ切れなくて、落ちちゃった。

「エーデルフイア！ 何をしているんだ、危ないだろ？」

あわわ、お父さんが怖いよ。思いつきりテーブルから落つっちゃったからね。思いつきり体打つやつたからね。痛いよ。

「那我一、那我一、那我一、那我一、那我一、」

「ああもう、痛かっただろう？」まだ小さこんだから無理をするんじゃない

「九」

「みんなでい、お父さん。

「ちゃんと反省したか？ なら、お風呂に入らうか。お風呂に入れ  
ば、気持ちよくて痛いのも忘れるや？」

「阿莫？」

なぬ！？ お風呂から逃げるために落ちて、結局お風呂に入らなくてはならないのか！ で、でも痛くなくなるなり……。怖いけど。あ、でもお湯に浸かってる間はあつたかくて気持ちいいなあ。

でも、上からお湯かけないで！ 上からお湯をかけられると怖い！

「也々一。」也々也々一。」

上からかけられるのは怖いって！

「よし、きれいになつてゐな。どつするエーテルフィア？」もう少  
くら陽一はつぶやいた。

「何故？」

漫かつておく！ そんな意味を込めて鳴く。だつて、温かくて気持ち良いしさ。しかも、わづきの恐怖と気持ちよさで、痛いのびつか行つちやつたしね。

「ただいまー。フォンシュベル、エーデルフィア」

「 もう いー 」

お母さんとお兄ちゃん、そしてほかのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが帰つて來た。私は急いでお湯から抜け出し、飛んでお姉ちゃんたちの下へ向かう。

「 わわー！ お風呂入つてたんだね、びしょびしょ。ほり、まづは体拭こうね」

これを言つのは一番上のお兄ちゃん、カーヴァンキス。そして、私が飛びついたのはその妹、お姉ちゃんのオースティアだ。

あ、もちろん二人とも人態取つてるよ？ ドラゴンの姿だと私が寄つて来ないから、逃げるから。

乾いた布で私の体に、鱗を伝つ水をきれいに拭つてくれるカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん。

その後は、みんなでご飯だ。みんなは手づかみか、スプーンやフォークつぽいもので食べているが、私はまだこの手で上手に掴んで食べられないで、そのまま皿に盛られた料理にかぶりつく。

まあ、お父さんもソレが分かつてゐるから、私のご飯は食べやすいものばかりと考へて作ってくれるんだよね。お父さん大好き。はぐはぐとかぶりつく肉。肉美味しい。でも、野菜も美味しいんだよ？ ドラゴンは肉食で野菜は食べないうつて言つ勝手なイメージがあつただけに、おかげで野菜が出たときはびっくりしたけど、美味しいからそれでよし。

「 皿いか？」

「 きゅー！」

「 うん、美味しい」

「 今度調理方法教えてくれ」

「あ、俺も」

「フォンシユベルは本当に料理好きよね。私が料理する暇がない」

あはは、お母さん、料理やめて。前、頭の上からお母さんの料理見てるとき、本当に怖かつたんだから。

よく分からぬ調味料を大量にいれるは、その辺の加減を知らないは、何かを焼けば絶対に焦がすはで。

確かあの時は、お兄ちゃんたちが帰つて来た瞬間に飛びついでつたんだつけ。で、お兄ちゃんたちの頭の上で丸まつてた。

「げー!? お母さん何してるのさー!? ハーテルフィアが怯えてるー!」

「あーり? どうしたの? お母さん怖くないでしょ?」

「……ああ、この意味不明物体のせいが。お母さん料理やめて。怖わざ」

そのおかげでお母さん、よつぱんの「じがない限り料理をしなくなりました。最近ではお母さんの料理を避けるために、サーファーお兄ちゃんやカーヴお兄ちゃんが料理を覚えるようになつた。

おかげで、あの黒魔術的な料理を見る」とは無くなつたよ、安心。

「美味しかったー。おとーちゃんとお母さん」

「きゅきゅーーー」

ホント、美味しかったなあ。お父さんの「飯は美味しいから好きだな。

「せ、ご飯も食べたし、ハーテルフィアはそろそろ寝なくちゃね。いっぱい食べていっぱい寝て、大きくなりうね?」

「あゅー!」

大きくなるなら寝る！ いっぱい食べていっぱい寝る！  
そうして私専用の小さなベッドに飛んで下りた私は、そこに置か  
れたやわらかい布の上で、きれいに体を丸める。気持ちいいー。  
よし、眠くなつた、おやすみなさい。

## 狩りに行きましょ

10歳になりました。やつと日常生活で困らないくらい話せるようになりました。いやいや、お父さんたちにはかなり苦労をさせたなあ。私が中々話せないから。

でもまだ、やっぱり体は小さいんだよねえ。未だに私の生活の場のメインはお母さんの頭の上だからね。でもいいの、楽しいから。私の考へることが、やつと伝えられるようになつて嬉しいから。

「エーデルフイア、今日は何が知りたい？ 僕たちが何でも教えてあげるよ」

「んとね、そつやつて人間の姿をとる方法が知りたい！」

ちなみに、しゃべれるようになつてからの私は、とにかく質問攻めだ。お父さんに聞き、お母さんに聞き、お兄ちゃん、お姉ちゃんに尋ねまくりだ。

あれはどうなつてるの？ あれはどうしてあなるの？ どうして？ どうして？

小さな子供特有の興味の持ち方で、毎日を質問と回答の日々になつていてる。

「エーデルフイアが人間の姿を取るのは、まだまだ無理だよ？ これは100を超えたあたりから、自然に分かつてぐるものだし」「そーなの？ うー、残念ー」

人間の姿を取れるのならば、練習しても人の姿になりたかったのにな。……でも、今の私が人になつたら、何歳くらいに見えるんだろう？ 幼児？ 小学生？ どちらもイヤだわー。

でもまあ、今はまだちびあらびドリフンでここや。そのまづがお母さんの髪に隠れられるからね。

「ほり、おこでヒーデルフィア」

そうしてお母さんに呼ばれた私はお母さんの髪の中に移動する。パタパタ、羽を動かして移動した。

お母さんの髪の中つて落ち着くんだよなー。小さい頃からずっとじいばっかりだからねー、あはは。

「ちよ、お母さんばっかりヒーデルフィアと一緒にはずるこつて。ヒーデルフィアおいで。一緒に狩りに行こうっ。」

「えぬー?..」

あ、しまった。つい普通に鳴いた。でも、狩りは行きたい！ 行きたいよー。

「ほーら、行きたいならおいで。外に出て、俺の背中に乗つて」

それと、お兄ちゃんたちのドラゴンの姿もやっと怖くなつたよ。お父さんたちはまだ大きすぎで怖いんだけどね。

その後、外に出たカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、その上にお兄ちゃんたちが人態のまま乗り込む。そして私は、お姉ちゃんの頭の上だ。

そうして私たちが乗り込むと、カーヴお兄ちゃんは大きな羽を広げ飛び立つ。おお、地面がよく見える。

「ヒーデルフィア、危ないから身を乗り出したらダメだよ」「つて、言つてるそばから飛ばされそだよ。ヒーデルフィア、ち

みつと抱き寄せるよ」「ああ、ああああ……」

鳥を乗っ出して下を見ていた私。その結果、飛ばされかけたらし  
い。サーファお兄ちゃんが私を抱き寄してくれた。うん、これで飛  
ばれないね。

抱き寄せた後のサーファお兄ちゃんが真剣な顔で注意してくれるか  
ら、ついつい普通に返事せずに鳴こちやつたじゃんか。

「怒つてないから顔を見せて？ 大丈夫だから」「さあー

あわわ、本当に怒つてない？ 怒つてない？ 怖いよ。怖いと、  
ビクしても普通に話せずに鳥を抱きあげりゃうんだよね。

「怒つてないって。だからね？ ほり出でっこで」

「さあさあー？」

本当に？ そう尋ねたいのだが、話せなかつた。鳴き声で尋ねるこ  
ととなるが、サーファお兄ちゃんはあつせりと理解してくれた。

「怒つてないよ。でも、今度からは『氣をつけ』ね？」

「さあー。」

なら、大丈夫、かな？ でもまだ怖くて話せないんだけどね。で  
も、もう少ししたら恐怖も消えて、話せるようになる、と思つ。

そうしてサーファお兄ちゃんに抱き寄せられたままでしまく飛  
ぶと、いつも狩場にしている場所にたどり着いた。

「や、やつを下りてくれ。俺も人態を取る」

そうしてカーヴお兄ちゃんも人態を取ると、獲物探しの時間だ。  
とりあえず、私はお姉ちゃんの頭の上だが。

「エーテルフィアはここ、お姉ちゃんの頭の上。危ないから勝手に動いたらダメだからね」

「うん！」

お姉ちゃんから離れると危なくない？ 私、お姉ちゃんたちの使  
う魔法？ 魔術？ まだ全然使えないんだから。

「お、いたいた。ティア、エーテルフィアを頼むぞ。サーファ、行  
くか」「ん。エーテルフィア、何があつても、絶対に、ティア姉から離  
れるんじゃないよ？」

そこまで区切りながら言わなくても。離れたら危ないから、き  
んとティアお姉ちゃんと一緒にいるつて。

私、たつたの10年で死にたくないよ？ 前世でも21年しか生  
きてない、ただの若輩者だつたんだから。

「よし、会図をしたら頼むぞ」

「おつけ」

「…………、GO！」

カーヴお兄ちゃんが言つと同時に、サーファお兄ちゃんが魔法だ  
か魔術だかを放つ。威嚇つてヤツかな？

そして、獲物がそれで怯んだ瞬間にカーヴお兄ちゃんが飛び込ん

だ。おお、かつこい。あつという間に一匹仕留めた。

「きゅ？」

つてあれ？ いきなり視界が動いた。……さつきまで私たちのいたところがお兄ちゃんの放った魔法で真っ黒けです。

そしてその真っ黒けの地面には、何かもう一匹獲物がいた。……つまり、私たちはその獲物に襲われかけていたと。それに気づいたティアお姉ちゃんが避けて、お兄ちゃんの放った魔法に焦がされたわけか。

うん、びっくりした。

「大丈夫、エーテルフィア？ いきなり動いたからびっくりしたでしょ？」

「きゅ、きゅ、」

お？ うんと答える予定が、鳴いて答えるになっちゃったぞ。相手びっくりしてたんだね、私。

「でも、大きいのが獲れたから今日はいいのが食べられるよー」「きゅきゅー？」

なぬ！ 何ですと！？ いいのが食べられるのは歓迎でしょう！

「お、機嫌は戻つたみたいだね。なら、帰ろつ。ほら、背に乗つて」

そうしていると、いつの間にかお兄ちゃんが人態を解いて、ドラゴンの姿に戻つていた。私はしつかりとお姉ちゃんの頭の上に乗り、髪に掴まる。

それを確認したのかどうかは分からぬが、お姉ちゃんもドラゴ

ンの姿となつたカーヴお兄ちゃんの背に乗つた。

「ふふ、帰つたときのお父さんの反応が楽しみだな。

「おお！　いいのを捕まえてきたな。今口は『駒走だな』

帰つて、獲物を見せたときのお父さんはすこかつたよ。目を輝かせてお兄ちゃんから獲物を受け取つてた。

今日は本当に『飯が楽しみだ。

そして、帰つて來た私、現在お母さんに捕まつてます。

「お帰りなさい、エーデルフィア」

「お母さん、私たちには？」

「お帰りなさい、エーデルフィア」

「おお、お帰りの挨拶が私限定。つまり、これはこっちに来いと、そうじうことだね。

「きゅう！」

「んちよ、よしょ。羽を広げてせっせと飛び、お母さんの下へ向かう。

「お帰りなさい、エーデルフィア。あなたたちもね、サーファイルス、オースティア、カーヴアンキス」

「おかーさんただいまー」

「エーデルフィア、怪我は無い？ 大丈夫？」

「大丈夫だよー、お兄ちゃんたちが守ってくれるもん」

だから、大丈夫だつて！ そんなに強く抱きしめないで…！ 痛い、痛いから！

「あゅ、あゅあゅ るーーー！」

咄嗟のときは普通に話せないから、それで悟つて離して！

「お母さん、エーテルフィア、痛がつてない？」

「あゅー。」

分かつてくれた！ 助けてお兄ちゃん、お姉ちゃん！

「あら？ 大丈夫でしょ？」

「きゅ……きゅー……」

最早話す余裕もない時点で氣づいてもらいたいかな？ お母さん。痛い痛い痛い痛い。

「痛がつてる！ 痛がつてるからーーー！」

「ああ、ゴメンねエーテルフィア。さ、あなたはお昼寝の時間だから、休もうね」

お昼寝？ 狩りについて行つたら、絶対に帰つてきてすることはお昼寝だよね、疲れないのに。でも了解、きつちり寝ます！ 大きくなるためにもしつかりと休みます！

そうして、昔と比べて少しずつ大きくなっている私専用のベッドに移動し、きれいに丸くなる。

じゃあ寝るけど、『飯の支度が整つたら起こしてよー』馳走楽しみなんだからね！

ちやんと起<sup>ひ</sup>されたよ。つて言<sup>いつ</sup>か、いいにおいが漂<sup>ひら</sup>い始<sup>め</sup>めぼ  
んやつと皿<sup>さら</sup>を覚<sup>おの</sup>まし始めた<sup>り</sup>起<sup>ひ</sup>された。『はーん！

「H—デルフィア、いいにおいがしてるだろ? 『飯<sup>ごはん</sup>だよ』  
「うん! いいにおいー!」

肉<sup>にく</sup>の焼<sup>や</sup>けた美味<sup>うまい</sup>しそうなにおいが漂<sup>ひら</sup>てるねー! うん、ぱつち  
り皿<sup>さら</sup>は覚<sup>おの</sup>めた。

「おはよひ、H—デルフィア。よく眠<sup>ね</sup>れた?」「  
「いっぱい寝<sup>ね</sup>たー! お腹<sup>はら</sup>空<sup>うつ</sup>いたー!」

『のいいにおいには逆<sup>さわ</sup>らえない! 早く食べよ! よ。みよ。  
そうして私がテーブルの定位置につくと、お父さんとお母さんが  
微笑み、スプーンとフォークに手をつけた。

食事開始の合図ですね、分かります!!

いっただきます!!

皿<sup>さら</sup>の前に置かれた、こんがりと焼<sup>や</sup>けた肉<sup>にく</sup>に思い切りかぶつつく。  
うん、すっごい美味しい!

だが、そのままかじるのでは、骨<sup>ほね</sup>に付いた肉をきれいに食べれる  
ことが出来ないぞ! それが悔<sup>うらやま</sup>しい!

が、だがね! 私が自分できれいに食べよ! といつても、『コリコリ<sup>コリコリ</sup>』  
の手<sup>て</sup>と爪<sup>つめ</sup>じやきれいには取れないのだよ! 悔<sup>うらやま</sup>しい!

「H—デルフィア、貸<sup>あ</sup>して! うん。きれいに取<sup>と</sup>つてあげる  
「お姉ちゃん! お願い!」

お姉ちゃんのありがたいお言葉に、私は横に座るお姉ちゃんに皿<sup>皿</sup>と肉を手渡す。きれいに取つて！ きつちり食べる。

……まあ、私はドラゴンの姿だし、骨も食べるんだけど、肉は肉。骨は骨で別に味わって食べたいんだ。

「ほら、きれいに取れた。でも、骨も残さず食べなきゃダメだよ？」

「これも、尊い命なんだからね」

「うん！ ゼーんぶ、ありがたく、美味しい食べるよ！」

私たちは、常日頃から命を喰らつて生きているのだから、それを忘れてはならない。私たちが食べているこれも、尊い命。私たち生き物は皆、命を喰らうことと、自らの命を繋げているのだから。

そうしてきれいに取つてもらつた肉を食べた後は、骨だ。骨はこの両の手でしつかりと掴んで、がじがじと齧る。歯めば歯むほゞ味が出る。最高！

そして食後。…………まだ寝ないよ！ お昼寝したもん、<sup>1</sup>飯前に起きたばかりだもん！

「そ、ソーテルフィアは…………」  
「寝ないよ！」

先に釘を刺すべし！

「さつき起きたばかりだから眠くない！ だから寝ないからね

「でも、寝ないと大きくなれないよ？」

「うー！ で、でも眠くないもん！」

「横になつてるので、眠たくなれるかもよ～ だから寝ようね

「やー、眠くない！」

早く大きくなりたいけど、寝れないもん… ま、まあ前の狩りのときは帰ってきてお昼寝して、それからすぐ「」飯食べて、その後すぐに寝ちゃったけどね。

でも今日は眠たくない！ この間は「」飯のときもいつもしてたから寝たけど。

「ここから寝よしね、Hーテルファイア」

「きゅうつ…！」

って、こきなり持ち上げないでお父さん… まだ寝ないって…。

「あつはつは、相変わらず可愛いい鳴き声だ。でも、成長のためには寝なくては」

ぐう！ 可愛いとか褒めても、それでも寝ろとのたまうか！ で、でででも、ここできちんと寝れば早く大きくなつて、人態を取るのも早くなるかな……。

……よし、今はベッドに丸まつておくだけ丸まつておいつ。それで眠たくなればよし、眠れなければ泣き付けばよし…。

結果、私はお父さんに抱えられたままでベッドまで運ばれ、下ろされた。

「ほり、ここ子だから寝よしね

もう！ 仕方あるまい、眠れるかどうかは置いておいて、とりあえずベッドで丸まつじやないか。

# 人間は怖いです

さあ、起きた？ そんな声で鳴きながら私は目を覚ました。結局あのまま眠れたみたいだね。

まま戻れたみたいだね。

つてあれ？ まだまわり暗いね。まだ夜？ そう思いながらベッドを出て、近くで眠っているであらうお父さんたちを探す。

「也々乃へ。也々乃一々。」

お父さんまだ暗いよ？　つてあれ？　いない。もう起きてるの？　んたちつてこんな早くから起きてるの？

「あみつ、あみつ」「ん？ ハーテルファイア、もつ起きたのかい？」起始めたまままだ早いよ、もう一度お休み

鳴きながらお父さんたちを探していると、案外早く見つかった。  
結構そばにいたよ。

「ほら、ベッドに戻るわ。しつかり寝て、大きくなろう。な？」  
「あゅ、あゅー」

うう、ずっと寝てばかりだよ。でも大きくなれるって言つ言葉には勝てない……。早く大きくなりたいけど、寝てばかりなのも。

そう思つている間にも、お父さんは私専用ベッドへと運ぶ。この籠ベッドから逃れられるのはいつの話だらうなあ。

最初から比べれば少しずつこの籠ベッドは大きくなってるけど、どこまで大きくなるんだろ。

「いい子だから寝ようねー」

結局寝かされるのが、面白くないな。  
でも、ベッドに戻つて丸くなれば簡単に眠れるのが幼さ故か……。  
まいか。

としあえずくると丸まい、田を廻る。眠れるかどうかは別として、こうしてお父さんが安心、とこりか何も言わなくなるならそれでいいよね。

さあ？ いつの間にかまた眠つてたみたいだね、びっくり。寝  
れないと思ってたのになあ。

あたりを見渡すと、もう明るい。よし、朝だね。これで起きても  
ベッドに戻されないよね。

「さあ、おかーやん！」

「おはよう、エーテルフィア」

「あ、起きたんだエーテルフィア。今日は何をする？」

お兄ちゃんたちもお母さんと一緒にいたんだね。今日は何を教えてもらおうかな。

昨日の肉が残つてるはずだから、今日は狩りには行かなくていい  
だらうし。だから、うーん、どうしようかな。  
……！ そうだ、うつようひとつ。

「食べられる草と、食べちゃいけない草の見分け方教えてー

分かれば、草を摘みに行くだけなら私一人でも行けるようになる  
からね。いつもでもお兄ちゃんたちと一緒にじゃ、効率悪いし。

「よし、ならもう少ししたらこいつも草を摘みに行く場所に行こう。

「うん！」

れやー！ 鳴きながらお礼も込めてお兄ちゃんたちの周りをふよふよと飛び回る。そんな私を見つめるお兄ちゃんたちの皿せ本当に優しい。

あはは、お兄ちゃんたち大好き。そう思いながら飛んでいると、不意にお母さんに捕まつた。え？ 何？

「エーデルフイア、あの子達がいるから大丈夫だとは思つけど、気をつけろのよ、いい？」

「うん。 むかしの」ことがあつたら、お母ちゃん呼ぶね」

多分大丈夫だと思<sup>う</sup>けど。

「何かあつたら、大きな声で呼びなさいね。」  
「ラゴンになつて、エーデルフィアたちを助けに行くからね」

分かつた、大きな声で呼ぶよ！ おかーさんっ！ つて呼ぶからね。そのときは助けてよ。

それからしばらくして、私はドラゴンになつたお兄ちゃんに乗り込み、いつも草を摘む場所へと向かう。

緑！ 緑！ 緑！ きれすぎる！ いつ見てもきれいすぎだ！

「よし、じゃあおむ記せよ。たけの食べられたの草講座を開講しちゃうか」

お兄ちゃん、よろしく！

「まず、これ。絶対に食べちゃダメだよ。食べたら死んじゃうか

」「う

「ふえー?」

「俺たちには大して害はないけど、Hーテルファイアは小さだから、簡単にこの毒にやられる」

「」「怖い……」

「この毒にやられるのは私だけですか。ぐうー

「まあ、これはすぐに分かるから大丈夫だよ。ほり、ここ見て」  
カーヴお兄ちゃんはそう言つて、葉を裏返す。そこには黒い毛？のようなものが生えていた。

「これはこの辺の草で唯一、裏側に黒い毛のよつなものが生えてるんだ。だからすぐに分かる」

な、なるほど……。それは簡単でいいかもしれない……。

「なら次、これは食べられるけど、こいつちは食べられない。そつくりだから間違えないようにね」

「ん、んー？ どう違うの？ 全然分かんないよー」

そう言つて見せられた草は、全く同じものにしか見えなかつた。じつくり見せてもらつても、どう違うのか全く全然分からない。お兄ちゃんたちからその草を両方とも受け取り、見比べてみる。  
……あれ？ どっちが食べてもよくて、どっちがダメなんだっけ?  
あれ？ あれえ？

「お兄ちゃん、ビーフちが食べてもいいんだつけ？」

「右に持つてゐるほうが食べても大丈夫なほう。左に持つてるのは、絶対に食べないよ！」  
「いい？」

「はーーー！」

なるほど、右に持つてゐるほうは食べても大丈夫で、左に持つてゐるのは食べたらダメなのか。うん、見分けがつかない。

「うーん、じつくり見ても全然分からぬぞ？　お兄ちゃんたちはビーフやつて見分けをつけてるんだろ？」

「お兄ちゃんたちはビーフやつて見分けをつけてるの？　全然分かんない」

「ん？　見てもわからんないよ？　これはにょいで区別するの」

説明はお姉ちゃんがくれました。にょい？　にょい……。

「べつねやつーーー！」

た、食べられないほうの草のにおいが恐ろしいほどやばい！　すつごこくせこ！　ありえないにおいだ！

そうしてみると、不意に私たち以外の声が耳に届いた。その瞬間、カーヴお兄ちゃんは人態を解き、エラゴンの姿に戻つて私たちを庇う。

何か話す声だね、何で言つてゐのかはよく分からぬんだけどさ。

「お、おー……、じーじーだよ……」

「知るかよ！　でも、早く戻らないと……」

「じーじー、竜神様のいらっしゃる山だぜー？　無礼にならないうちに帰らなくちゃ」

「なら、帰るための道を探して来いよ。」

……？ 竜神様？ つていうか、迷子？

「しつ。エーデルフイア、喋らないで」

「きゅ？」

「人間は絶対に敵ではないと言い切れないの。今からお兄ちゃんが追い払うから、それまで黙つていて」

人間って、敵なの？ 微妙なところなのか。そうしていると、さすがに大きなドラゴンの姿に戻っているカーヴお兄ちゃんの存在に人間たちが気がついたようだ。

「りゅ、りゅりゅりゅ、竜神様！ も、申し訳ございません、迷つてしまいまして！！」

「町へ戻るなら、あっちの道だ。早く帰れ」

カーヴお兄ちゃんはそう言つて、ある方向を指差す。あっちに町があるのかあ、行つてみたいなあ。

そうしている間も、お兄ちゃんは人間たちが町へと戻るのを待っていた。……あれ？ 人間と田が合つた？

「ち、小さなドラゴン！？」

「きゅ！？」

あ、あわわ。思いつきり目が合つた。ガン見された！ あわ、あわわわわ。げ、限界！

「 ぴぎやーつー！」

思い切り叫んじゃったよ。だって、あんなにしつかり見られると怖いじゃん！

「とつと帰れ。弟妹たちに手を出したらそのときは……」

やうやつて私が叫んでお姉ちゃんにしがみ付いたからか、カーヴ

お兄ちゃんのまとう雰囲気が怖くなつた。あわわわわ。

お兄ちゃん怖い。人間怖い。お兄ちゃん怖い。人間怖い。

「　おかーやーんっ！」

ぱわり。

呼ぶと同時に羽を動かす音が耳に響いた。ピギヤーつ、お母さんの「ドリーン」の姿は大きくて怖いよう！

お母さんはそれに気がついてくれたのか、私たちの目の前に下りると同時に人態を取つた。人の姿になつたお母さんで、とりあえず飛び込む。

「おかーさん！」

「エーデルフイア！　何？　そこの人間が何かしたのね、覚悟なさい」

はわわ、お母さんも怖いよう。でも、今さらお母さんから離れるのはもつと怖いよう。そんなこんなで、私はお母さんの頭の上でしつかりと髪を掴んでいた。

ちなみに、その恐ろしいお母さんを止めたのは、お兄ちゃんたちだつたりする。

「お母さん、ちょっと田が合つただけだから手加減してよー？」

「何かされたつて言うわけじゃないの。なら、この姿で一回ずつ殴

るだけで許してあげる。その後は町に戻してあげるからね

「い、一応手加減されてる、のかな？一発ずつ殴つただけで許すつて言つてるし……。ってあれ？そもそも、その人間悪くないんじゃね？」

「さゆ、さゆー……」

それを訴えるために、少し強めにお母さんの髪を引っ張つてみた。でも怖いからうまく喋れない。

「ああ、大丈夫だからねエーデルフィア。何も怖くないから」

いやいやいや、そう意味じゃなくてですね。でも、今の私じゃ普通に話せないしなあ。

うん、「ゴメンね人間さん。私じゃ、このお母さんを止める」とは無理です。

結局お母さんは私を頭の上に乗せたままでその人間を殴りました。一発、グーで一撃入れました。

思い切り振りかぶつて殴るものだから、私が落ちるかと思つたよ。咄嗟に髪を掴んだから落ちなくて済んだんだけどね。

「よし、これでいいわ。後はさつと山を下りなさい」

い、痛そう……。殴られた人間の頭には、きれいなたんごぶが出来上がつていた。「ゴメンね、人間さん。

「町はあつち。」うちに来ないでくれる？ 可愛いこの子が怖がるから

「は、はははい！　申し訳ありませんでした、龍神様」

と、とりあえず早く目の中から消えてよう。目が合ひそいで怖いんだよう。人間大きいから怖い！

目に涙を滲ませ、人間が見えないようお母さんの髪にしつかりと頭をつけていると、その間に人間は山を下りたらしい。お母さんが頭の上から私を抱き下ろした。

「もう大丈夫だから。ほら、人間なんていないでしょ？？」

言われてずっと瞑つていた目を開く。うん、何もいね、よかつた。

「エーデルフィア、泣いてたんだね。可哀想に」

「きゅう」

お母さんに抱かれた私にお兄ちゃんたちは近寄り、私の目尻に光る涙を拭ってくれる。ありがとーお兄ちゃん、好き。でも、転生して初めて人間を見たけど、この小さなドラゴンの姿で人間を見ると、本当に怖いな。

今日は人間の姿を取つたお兄ちゃんたちがいてくれたから怖くなかったんだけどさ、私一人で、この姿であつたら絶対に泣いて帰るね。

「また人間が来ないとも限らないし、今日は帰ろう。エーデルフィア、お母さんと一緒にいてね？ 危ないからお母さんから離れたらダメだよ」

「きゅ、きゅう……」

ダメだ、まだ怖くて普通に話せやしないや……。この、怖いとき

とか咄嗟のとおり普通に話せなくなるにつれて、何とかなりなうことかな。

いつもながらも、私はお姉さんの頭の上で、デリバリーの姿のお兄ちゃんの背に乗り、洞窟へと帰郷するのであった。

竜神つて何ですか

お兄ちゃんの背に乗つて洞窟に帰つて来た私たちだが、帰つてからの私は完全にお母さんの頭の上だ。飛んで逃げようとしても、何故かすぐに捕らえられるのだ。

「お、お困る?」

いいから、エーテルフィアはお母さんのそばにいてちょうだい」

한국언어

何でかな？ どうしてかな？ どうしてお母さんまでさしつけて私を捕獲するの？

何となく危険を感じるから、お父さんとのJINはでも逃げたいの  
に、お母さんは逃がしてくれない。

「お母さんばかりエーテルフィアを抱いて、ずるいよ。エーテル  
フィア、じつちおいで」

そうしていると、救い主が現れた。お姉ちゃん！

卷之二

「つて、喋ってくれなーの？」 ああ、お姉さんの無理の訴えが怖かつたんだね

「也沒...」

怖かつたよ、お母さんの頭の上から飛び立とうとするたびに捕獲の手が伸びてくるし、どうして捕まえるのか聞いても、そばにいて

だから、お姉ちゃんに呼ばれて飛んで、お母さんと捕まひなかつ

たのはよかつたよ。

そういえば、お姉ちゃんに聞いたら答えてくれるかな？ ずっと、疑問だつたんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。人間たちが竜神様って言つてたの、なあに？」  
「ああ、それは私よりも、お兄ちゃんかお父さん、お母さんに聞いて。私もよく分かつてないんだ」

「なぬ？ ならばつと。

「おかーさん、竜神様って、何なの？」  
「1000年位前に、人間たちが魔物と戦つているときに手伝つてあげたら、勝手に竜神扱いされたの」  
「まもの？」

「」の世界、そんなものもいるんだ。

「そう。」の山はお父さんやお母さんがいるから魔物もいなくて安全だけど、」の山を一步でも出ると危険だからね。エーデルフィアはまだまだ出たらダメだからね」

「きゅ、きゅ！…」

それを言つお母さんが怖いです。まず、お母さんが怖いから勝手に山から下りたりしないよ。そもそも、ちびちびの私じゃ、一人で山を下りたりは出来ないよ。

私一人でパタパタ飛んでたら、山を下りる前に日が暮れちゃうつて。それに、まだお母さんたちに甘えたいお年頃だから、絶対に人はイヤ。

だから、思い切りお母さんに抱きついた。甘えたいから。いつぱ

いいっぱい甘えたいから。

「お母さん。私、お母さん大好きだよ。だから、一人にならない。絶対に誰かと一緒にいる。一緒にいて？」

「私たちの可愛いエーデルフィア。いつまでも、ずっとお母さんたちはあなたと一緒にいるからね」

「うん」

ずっと一緒にいて。私を一人にしないで。一人は、寂しい。

最近、夢を見るんだ。私が一人ぼっちになる夢。私はドラゴンの姿じゃなくて、人態を取れていて、まわりにお母さんたちがいるだろ？と思つて探しても、誰もいないんだ。

誰もいない、一人だけ。私しか、いない。寂しい。

「大丈夫、お母さんたちはずっと一緒にいる。エーデルフィアを一人にはしない。絶対に、……絶対」

お母さんはそう言つて私を抱きしめた。

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。ちょっと来なさい」

「ん？ どした？」

「どうしたの、エーデルフィア。……つて、泣いてない？ あー、何かよく分からぬいけど大丈夫だよー」

「何がどうだつていうの？ 大丈夫だよ、エーデルフィア」

お母さんが呼ぶと、お兄ちゃんたちはすぐにそばに来てくれる。そして、代わる代わる私を抱き寄せた。

お兄ちゃんたち、温かいな。この温もりを失いたくない。だから、足搔くよ。何があつても足搔くから。

「ほら、涙を拭こうね、大丈夫だから」  
「きゅ、きゅー」

もうまともに話せない。今の私の口から発せられた言葉は鳴き声だけだ。

「ただいまー」

そうしてみると、お父さんが帰つて來た。……そういえば、お父さんどこに行つてたんだろう。

「ちょっと町に出て、人間どもに忠告してきた。これでしばらくは山に入り込むバカはいないだろ」

「お疲れ様、フォンシユベル。少しくらい、人間の王を痛めつけてきた?」

「少しといわす、徹底的に殴つてきたよ。……宰相を」

哀れ、人間の王。つていうか、宰相。いないなあと思ってたら、山を下りて町に出てたのか。そして、王を、というか宰相を殴つてきたのか。

あー、いろんな意味でごめん、人間たち。私が怯えたせいだね、ここまで宰相がやられたのは。

そう思つてたのが顔に出てたのかな? お父さんは不意に私の頭に手を置いてきた。温かくて気持ち良いんだよね、これ。

「エーデルフィア、大丈夫だよ。あれはそれ相応の報いだから

奴らはあらうことか、エーデルフィア、君を怯えさせたんだ。それくらいは普通、というか手加減したほうだよ。

お、お父さん怖い…………。にっこり笑つてその言葉を放たれると  
本気で恐ろしいです。

家で一番怖いのはお母さんだらうナビ、お父さんも結構怖かつたんだね。今思いつき実感したよ。

「阿々——阿々乃阿々——」

だから、助けてお兄ちゃんたち。私をこのにっこりと微笑みなが  
ら怖い言葉を放つお父さんから逃がして!!

お父さんが本氣で怖いです。私を捕まえて、田を合わせてこつこつと微笑みながら言つから、余計怖いです。

「お父さん、エーテルフィアが本気で怯えてるから。冗談もほじほ

「九五」

お姉ちゃんがお父さんから私を回収してくれたよ、その瞬間思い切りお姉ちゃんにしがみ付いたよ。

それにしても、何ですか？」「冗談ですか？」本気にしか聞こえない

「ああ、本気にさせてしまったか。安心しろ、冗談だ。

卷之五

「残り半分は！？」

「いいじゃないかそんなこと。それにしても、もう怖くなくなつたみたいだな、よかつた」

……はっ！ おれか、私の恐怖心を拭い取るための作戦！？  
あーうん、違つわ。田舎を合わせようとしたら露骨に田縁外すし。

「おーさん？」

「なななな、何だい？」

「线つ半分か、何？」

「エーラフイアガード」

疲れたんだからね、お腹も震つたりはしないよ。

「アーティストの心」

「ダメだよ、寝なきや」

「やーあだ！ 眠たくないし、わつきのお話まだ途中だよ？」

ダメたら、初めて人間を見て、ひっくりたたかれて、今では

卷之三

の  
?

- 1 -

בְּרִית מָשֶׁה וְעֵדוֹת

きたぞ。確かに、大きくなれないのは困る。

「ほら、大きくなりたいなら寝ようね。って言つたが、そろそろ寝ないと限界が来ると思つたんだナビ

「？」

「エーテルフィア、確かに5時間以上続けて起きてたこと、ないよね？」

?

はつ！ そういえばそうだよ。言われてみればそうだよ！ ああ、聞いたら眠たくなつてきた……。

「ううあえず、ベッドでぐるりと丸くなる。

「よしよし、素直ない子は大きくなれるよ。おやすみ、エーデル  
フイア」

「ああ……、おやすみなさい」

素直な私は早く大きくなるよー。そのためにも今は『ご飯までぐつ  
すり眠つていようつと……。

「エーデルフイア、『ご飯だよ。お腹空いたわつ? 食べよつ」

「んきゅ?」

ふわあ、よく寝た。起きて、鼻をすんすんと動かすと、いいにおいがする。今日の『ご飯は、昨日のお肉の残りかな?

そう思いながら、私は少し飛んで私を起こしに来たお兄ちゃんの肩に乗つてそのまま連れて行つてもらひ。人間、樂するためにはいろいろと考えなくては。

「エーデルフイア、自分で飛んで行こうよ。甘えてばつかりじゃダメだよ?」

「だつて、寝起きて上手に羽動かせなくて、前一度落ちたもん。

……だから、怖いんだ。ダメ?」

「う! そ、そうだったね。でも、『ご飯食べた後は、きちんと自分で飛ぶんだよ! ?」

「うん! ありがとうカーヴお兄ちゃん! 大好き! 」

ちなみに、これ事実。前、寝起きの大寝惚け状態でフラフラ飛んで、落つこちた。あれは痛かった。痛みで目は覚めたけど、最初は

何で床にいるのか、何で痛いのか分からなかつたもん。

田を白黒させてたら、私が落っこちたことに気がついたお父さんたちが来て、全力でかまつてくれたんだっけ。

「ああ、痛いだらう可哀想に」

「よしよし、大丈夫よ。ほーら、痛いの痛いの、どこか行けー」

子供用のこういう言葉、この世界にも、つて書つかドラゴンにもあるんだね。あの時は本気でそう思った。

ただ、飛んで行けじやなくて、どこか行けなのが若干リアル。そして、この世界でもお母さんの手はすごい。お母さんに撫でられたら、本当に痛いのどこか行つたしね。

前世の小さい頃はお母さんの手は魔法の手だ！ つて本気で信じてたけど、この世界でもそつぱつのはありそだ……。

おつと、そんなことを考へていてる間に、カーヴお兄ちゃんは既に私の席の前に立つていたよ。んちゅ、よこちょ。羽を広げて席へと下りる。

「よし、Hーデルファイアも来たしカーヴも席に着いたし、食べよつか」

それからは食事の時間ですね、分かります。これは昨日のお肉ですね、美味しいです。

昨日とは味付けが変わつてゐる、といふか、昨日は焼いていたけど今日は煮込んであるようだ。味がしみていてすつごい美味しい！

といふわけで、やつぱり今日も。

「お姉ちゃん、お肉取つて？」

「ふふ、貸して」「うん」

お肉と骨は別々に味わいたいから、きれいにお肉と骨を分けてください、ティアお姉ちゃん。

私が皿を押しやりながら頬むと、お姉ちゃんはこいつと微笑み、肉を取り始めてくれる。つきつき、楽しみだな。

「はい、取れたよ。きれいに取れたから、純粹に肉と骨と別々に味わえるよ」

「うわあい、ありがとーお姉ちゃん!」

言われて見てみると、本当にきれいに肉と骨とが分かれていた。  
お姉ちゃん大好きー!

せわせわせわせわせわせ。お肉美味しい、幸せ。がぶがぶがぶ。骨美味しい幸せ。も、最高すわ。

「H-ヘルファイア、肉や骨ばかりじゃなくて、草も食べるんだぞ?」

あ、草もあつたんだ。気がつかなかつたや。あるなら食べるーー!

「はい、最低これくらいこな食べる」と

……いや、食べるって言つても、これは多くない? しかも最低?

現在、私の田の前の皿には、草が山のように積まれています。お父さん、私の体の大さを考えて。私の体と同じくらいに積まないで。「ふう、盛りすぎよ、フォンシュベル。せめてこれくらいこなしないよ」

そうしていると、お母さんがその半分以上をパンツそりと移動させ

てくれた。ありがとーお肉もー… うさ、このへりこなり食べるよ。

うん、食べ過ぎた。お腹がぱつぱつと膨らんでるよ。こせー、せー草の量が多くたからね。でも、これだけ食べても全部成長に行くのは嬉しいわー。

「エーデルフィア、こいつぱに食べたね。ベッドまで飛べる?」

……、はーーー、よし、やってみよう。

羽を広げて、羽ばたかせて……、ぱと。自分のお腹が重たくて飛べなかつた、くそう。

「あー、せっぽつね。ほり、行こうか」

そうしていると、お兄ちゃんが落ちた私を拾い上げてベッドまで運んしてくれた。ありがとーお兄ちゃん。

まあ、いっぱい食べた後には寝なくては。いっぱい食べていっぱい寝て、いっぱい遊ぶ。これが、今の私が大きくなるための一一番の近道なのだから。

## あの一人に会いに行こう

今日の私たち兄妹の目的地。それは、じいちゃんとばあちゃんのところ。

じいちゃんとばあちゃんって、私、初めて会つ『氣』がするよ。じいちゃんとばあちゃんも一応この山に住んでるのに、何故か会わないんだよね。

つていうか、どうしてお兄ちゃんたち、そんなに嫌そうなの？どうして？ どうして？

「ああ、大丈夫だよエーテルフィア。エーテルフィアはきっと大丈夫」

「そうね。まだ小さいから」

「ああ、気が重い」

「？」

お兄ちゃんたち、何でこんなに嫌そつなんだら？ それに、私は大丈夫って、何？

そんなことを考へている間に、私たちはじいちゃんたちの暮らす洞窟の前に立つていた。お兄ちゃんたちが先に進むのを躊躇します。じいちゃんたち、どれだけ怖いの？

「早く入れよ」

そうしてたら、いきなりサーファーお兄ちゃんが誰かに蹴飛ばされた。……この人が、じいちゃん？

「おー？ エーテルフィアか？ 大きくなつたなあ、おいで」

「 もう？」

「 どうした？ じいちゃん怖くないぞ？ ほら、中に入らうつな。 カーヴァ、ティア、サーファ、お前らも早く来い」

やつぱりこの人がじいちゃんなのか。 そう思いつつ、抱かれたまで洞窟へと入っていくと、そこにもう一人いた。つまりこの人が。

「 ばあちゃん？」

「 ハーデルフィア！ ジヤン、ハーデルフィアを私にも抱かせてちようだい」

「 じやん？」

「 ああ、ジヤンって呼ぶのはじいちゃんの名前だ。 ジヤニーストリスを略してジャンだな」

「 じゃあ、ばあちゃんは？」

「 ばあちゃん？ ばあちゃんの名前はシフォニアって呼ぶの。 だから、ジヤンからねーアって呼ばれてるわ」

「 へー。 つて言つか、じいちゃんもばあちゃんも優しいじやん。 お兄ちゃんたち、何であんなに怯えてたのかな。

現在、ばあちゃんにしつかりと抱きとめられている私。 さすがばあちゃん、抱き方優しくて気持ち良いな。

「 最後に見たのは、ハーデルフィアがまだ生まれたばかりの頃だつたかしら？ 本当に大きくなつて」

「 知らない。 覚えてないよ」

「 当たり前よ。 ハーデルフィアはまだ生まれたてのちひちなドラゴンだったんだから」

「 きゅ？」

それ、本当にこいつの話？ 全く知らないんだけど。 全く全然記憶

にないんだけど。

「だから、それが当たり前よ。生まれたばかりの頃を覚えてる子なんていねいわ」

それもそつか。なら、今から新しへ思ひ玉を作りつゝ。つて」と  
で、皿にいっぱい甘えよつゝ。

「モモシロ」

ばあちゃんに思い切り頬ずりする。ばあちゃん、すつじい嬉しそうだ。……それを見るじいちゃんの目が怖い！！  
じ、じいちゃん、そんな目でこっちを見るのはヤメテ！

「ニア、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ。エーデルフィア、じいちゃんにも頬ずりしてくれないか？」

そう鳴いてじこちゃんの元へ向かつてみると、後ろから怖い声が聞こえた。

「あなたたちは、何もせずに帰るつもつ？」

あわ、あわわ。ばあちゃんが、ばあちゃんがすつゞに怖い！

「ああ、エーデルフイア、あなたは何も悪くないから怖がらなくていいの。私が言つてるのは、あなたたちよ。 カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス」

へ？ お兄ちゃんたち？ ジョリヒ？

「せっかく来たのに、どうして何もせずに洞窟から出よ！」としている。ほら、あなたたちも来なさい」「う……うそ……」

「うー、どうしてお兄ちゃんたちそんなに怯えてるんだろ。じゃあこもはあちゃんも優しいのに。」

やうやうて恐る恐る近寄ってきていたお兄ちゃんたちだったが、ばあちゃんの射程距離内に入った瞬間に、蹴り飛ばされた。

「ああ、ああいーー！」

カーヴお兄ちゃん！ ちょ、大丈夫！？ そう思つてたら、起き上がつたお兄ちゃんが盛大にばあちゃんに文句を放つていた。

「ばあちゃん！ いつもいつも、近寄つて來た孫を蹴飛ばすのやめるよー！」

「おー、生意氣になつたな、カーヴアンキス。教育的指導つー！」

「、今度はゲンコ！？」ゴンッて音がしたよー！ お兄ちゃん大丈夫？ 大丈夫？

駆け寄りたいのに、私はじいちゃんに捕まつて近寄れない、くわうー！

「……つてー。孫に問答無用で鉄拳かますなつての。ほら、エーテルフィアが怯てるじゃ ないか」

「あ、ホントだ。エーテルフィア、じつおりいで。じいちゃん、エーテルフィア離して」

お兄ちゃん！ 行く、行くから！ じこちゃん、離して！

「離すわけないだろ、バカガキ共。エーテルフィア、まだかまい足りないから離さない。カーヴァは大丈夫だ、ニアが手加減をしてるからな」

「う見えない！ もう見ても手加減してると見えない！ 力一握お兄ちゃん！」

「あつ！ ティアお姉ちゃんとサーファお兄ちゃんがカーヴお兄ちゃんを犠牲にして、若手引いてる！」

「じいちゃん、私もお姉ちゃんたちのところ行きたいから離してよー！」

「わゆい、わゆこわゆこーつ！」

「離してー！ う言いたいのにうまく言葉が発せなかつた！ くそつ！」

「でも、行動で大体何が言いたいかは分かるでしょ？ じいちゃん、離して、離してつたらー！」

「エーテルフィア、きちんと言わないと分からなによ？」

「うーーー、じいちゃん、分かつていながら言つてるね！？ 嘘のじわはつまく言葉が發せないんだ、勘弁してよー！」

「わゆいー、わやわーつーー！」

「あつはつは、分からなになあ！」

「わやるわるーー！」

「あー、全然分からんna！」

おのれ、じいちゃん。分かっていながら徹底的に無視か。そう思いながらじいちゃんを睨んでいると、突然視界が揺れ動いた。

「よし、エーテルファイアゲット。帰ろうか」

「よくやつた、サーファイルス。走れっ！」

「ティア姉、エーテルファイアをお願い！」

「分かつた。エーテルファイア、しつかり掴まつてね！」

へ？　え？　いつの間にか私はサーファーお兄ちゃんに捕獲され、ティアお姉ちゃんに掴まっていた。そして、私をしつかりと捕まえたお姉ちゃんたちは、走る。洞窟の入り口まで徹底的に駆けていた。だが、やはりじいちゃんたちは強かつた。気がついたら一人とも目の前にいたよ。目の前でにっこりと微笑んでたよ。

それを見たお兄ちゃんたちは、その場でしつかりと足が止まつてた、怖かつた。

でも、仕方ないよね。間違いなく後ろにいたはずのじいちゃんたちが目の前に、洞窟の入り口を塞いでたんだから。

「そう簡単に逃げられると思うか？　もう少し精進するべきだな」

「あらあら。この程度で逃げると思われるなんて、ばあちゃん悲しいわ」

「ちよ、じいちゃんたち怖いって…………！」

あわ、あわわわわ。にっこり笑うじいちゃんたちが本気で怖いよ。

そんな意味を込めて、しつかりとお姉ちゃんの髪を掴んだ。

じいちゃん怖い、ばあちゃん怖い。

ぴぎゃーっ！

「おかーちゃんっー！」

もういやもうダメ助けておかあーんっ！！

「エーテルフィア！！」

「おかげで助けてもつやだー！　じこじゅんもばあひゅんも怖い

「この子に何をしたの!? お義父さん、お義母さん!」「ん? 可愛がる以外は何もしてないぞ? なあ、ニアー

「もつヤダ怖ーー。 もーー。」

一 大丈夫、大丈夫だからね』

じこちゃんむばあちゃんも怖こよー。もうお家帰るー。

「大丈夫よ、お母さんと一緒に帰ろうね。カーヴ、ティア、サーフ  
ア、帰りましょ」

「了解」

カーヴお兄ちゃんは話と同時にアーティストの姿に戻る。今、帰らへん。もう戻る。じーちゃんたち怖こよ。

「…」

じいちゃんたち怖いー！ もうやだー！ そう言いたいのに、恐怖のせいか、鳴き声しかあげることが出来ない。くわづ。でも、お兄ちゃんたちはその間にじいちゃんたちのいる洞窟を抜け出して、大空を駆けていたよ。

「エーデルフィア、俺たちがあんまりじいちゃんたちに会いに来ない理由、分かつただろ？ あんまり会いたくないだろ？ 扱かれた

「わゆる？」

あれ？ 質問の最後に気になる言葉があつたのだが、まだ鳴くこ  
としか出来ないため、尋ねることができなかつた。くやしい。  
でも、帰る間、とにかく私は頑張つて尋ね続けていたよ。  
全部鳴き声にしかならなかつたけどね。

「んああ？」

扱かれるつて、どうして」とへ

「んああうへ」

お兄ちゃんたち、ずっと扱かれてたの？

「んああ、あやぬ？」

じこちゃんたち、昔からそんなに怖いの？

って、いい加減恐怖よ飛んで行け！ それから普通に話さ  
せりー！

ちなみに、お母さんたちは私がずっと鳴き声しかあげないものだ  
から、よっぽど怖かつたのだろうと、とにかくずっととかまつてくれ  
たよ。それは嬉しかつた。

事実、かなり怖かつたからね、じこちゃんたち。最初は優しいじ  
いちゃん、ばあちゃんだと思つてたから、余計怖かつた。

「よしよし、怖かつたね。でも、もう大丈夫だよ」

せうやつて撫でてくれる手が優しくて。ドリーミンの姿のままで顔  
を舐めてくれるお兄ちゃんの瞳が優しくて。

「 もう平氣。ありがとー、おかーむん、おにーちゅん、おねーちゅん。  
ん。 大好き」

「 お母さんも大好きよ、エーデルフィア」

「 僕もね」

「 僕も」

「 もちろん、私もね」

「 うん、みんな大好き。

「 おつと、お父さんも忘れないでくれなー？ お父さんもエーデル  
フィア大好きだぞ？」

「 うん！ お父さんも大好きーー！」

そしてこれは後日談。お父さんはこの日、私が寝たあとにじいち  
やんたちに文句を言いに行つていたらしい。

お兄ちゃんたち曰く、それは話し合いといつ名の喧嘩だつたらし  
いよ？ じいちゃんたちとお父さんって、どれだけ怖い勝負になる  
んだろう。

とりあえず、私たちが手を出したら間違いなく巻き添えを食らつ  
くらいに恐ろしいものだらうね、きっと。

だつて、竜神様だし。お父さんも竜神様、お母さんも竜神様。な  
ら、絶対じいちゃんたちも竜神様だろ。竜神同士の勝負なんて、考  
えただけでも恐ろしいや。

「 だから、安心しなさい」

次の日の朝、顔を合わせたお父さんにそう言われて本氣で何かと  
考えたよ。お父さん、じいちゃんたちに何したの？ みたいにな。

そしてね、この疑問はまだ解決していないんだよね、お兄ちゃん、  
お姉ちゃん。

「お兄ちゃんたち、じいちゃんたちに扱かれたの？」

「……思い出したくない過去だ」

「うん、お兄ちゃんもそうよね」

「確かに思い出したくないな、あれは」

「んきゅ？」

そそ、そんなに辛い過去なのか……。

「あ、不安にさせたみたいだね。でも、エーテルフィアはまだ大丈夫だから安心して。100くらいになつたら、じいちゃんたちに近寄らなくすれば扱かれないよ」

曰く、人態を取れるようになつたら徹底的に魔術、肉体的両方で扱かれる、らしい。こわ。

つまり、今の私で考えれば扱かれるのはまだまだ先ということですね、分かりました。極力近寄らないようにします。

## 教えて欲しいな

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、魔術教えて？」

小さいつちから、普通の魔術なら使えるんでしょ？ 人間の姿を取るのはまだ先でいいから、簡単な魔術くらい、使えるようになりたいな？」

「うーん、まだエーデルファイアには早いと思うんだけど……」

「確かに。ね、エーデルファイア。自分の年齢っていくらん？」

「きゅ？ 10だよ？ 10歳」

「そうだね、10だよ。10で魔術は早いよ」

「んきゅ？ 10で魔術を習いたいって言つのは早いのか？ 基準が分からないからなんとも言えないね。」

「だって、まわりに同じくらこの年のドラゴンはおらか、私たち家族とじいちゃんばあちゃん以外のドラゴン知らないしね。でも、そんなことどうでもいい。だからさ。」

「おーしーえーてー？」

「だ、ダメだつたら！ そうだね、50くらになつたら教えてあげる」

「そんな先の話、いやー！」

「50とかまだ先すぎるよー。10のヨジやする」とがあんまりないから退屈なんだよー。魔術教えてー。」

「ダメだつて。エーデルファイアにはまだ早いよ」

「でも、たいへつー！」

「うーん、じゃあ明日、町にでも下りてみる。お父さんとお母さんがいって言つたら連れて行ってあげるよ。」

「町！？　はい、行ってみたいですよ！――

「よし、じゃあお母さんだけに話して行こう。」

「町？　別に良いんじゃない？」  
何かあつたら町が滅びるだけだし」

「わっ！！　そしてかるっ！　でも、お母さんからは許可をもらひつたぞ。次はお父さんだ！」

「ダ・メ」

お父さん、超ひつじ。これは手強めだ。

「じゃあ、魔術教えて？」

「それもダメ」

「魔術教えてくれるか、町に行かせてくれるか、ざつち？」

「どつちもダメ」

「でも、退屈だもん」

んきゅー。しょんぼりとした私の鳴き声があたりに響く。それを

聞いたお父さんが少し焦り始めたよ。

……してやつたり。心中だけで、一矢つとめてくわ笑む。お父さん、そのまま落ちて欲しいな。下を向きながら、すっと悲しんでいるように見せつけ、お父さんの心変わりを待つ。お父さん、まだ？

「だ、だがな、町は危ないんだぞ？」

「俺たちがいるから大丈夫だよ」

「そうそう。エーテルフィアに害を成そつとするバカがいたら、即、引き裂くし」

「それか、ちょいどいいから新しい魔法の実験台になつてもうりつわ

お兄ちゃんたちがお父さんを黙らせに入つた！ 傍観者は参戦者となつたよ。だから、お父さん、ね？

「あーもう、分かつた分かつた。但し、一人で勝手にどこかに飛んで行かないこと。絶対にカーヴたちに引っ付いていること。守れるか？」

「んきゅー！ 守るー 守れるー！」

顔を上げたら超笑顔。これもある意味必殺技。溢れんばかりに喜びを感じさせて、ここまで喜ぶのならばと、次を考えさせる方法だ。ドラゴンとして生を受けて10年。前世のお父さん、お母さん。娘はあなたたちの子でいた頃以上に腹黒になりました。

そして翌日。いつも以上にぐっすりと休まされ、私たちは町へと向かう。いつものようにカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、私たちがその背に乗る。

さあ問題です。現在、私はどこにいるでしょう。見えないよね？ 見えないでしょ？

正解は、フードをかぶったお姉ちゃんの頭の上。お姉ちゃんのフードで殆ど私の姿は隠れていて見えないらしい。でも、私からはしつかりと外が見える。最強的だ。

「よし、行くか」

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。気をつけろよ、エーテルフィアを絶対に守るんだぞ、何かあつたら手加減するな。責任は俺が持つ」

「了解。エーテルフィアに害を成すバカには手加減は必要ないな」

「うわー、お父さんもお兄ちゃんたちも怖いな。でも、町が楽しみだから何にも言わない。」

「おつと、それとこれをオースティアに渡しておこひ。いいものがあつたら買つてくれるといこ」

「あ、ありがとうお父さん」

やつ言つてお父さんがお姉ちゃんに渡したもの、お金かな？ そういうこええ、この世界のお金つて見たこと無いや。後でお姉ちゃんに見せてもらひゆ。

そうしたやり取りの後、私たちはやつと出発する。山の入り口まではお兄ちゃんがドラゴンの姿で飛んでいくらしい。山を下りたら、後は歩くといふか、走るんだってや。

まあ、今は初めての町に期待を抱いて、お姉ちゃんにしがみ付いておくことにしよう。

でもその前に。

「お姉ちゃん、お父さんにむりつてたのつて、お金？」

「ん、そうだよ。つてあれ？ エーテルフィアにお金の話、したことあつたつけ？ お金つてどうこいつものか分かつてる？」

「うん！ お金とモノを交換するんでしょ？ お金つてどんなんの？」

「見たいなあ」

「うん、合つてゐよ。人の世界ではね、お金渡してモノをもらひ

んだよ。とりあえず、お金は町についで落ち着いたら見せてあげるね

おっけい、楽しみにしてるね。うーん、お金見せてもらつたら、この国の金銭事情も軽く聞きたいかな。……つて、10歳のドラゴンが聞くようなことじやないか。

でも、この世界でのお金やモノの価値つて分からないから、興味あるんだよねー。

「よし、山を下りたな。下に下りるから氣をつけろよ」

そうして、いる間に山を下りたらしく。さすがカーヴお兄ちゃん、早いなー。

その後、人懃を取つたカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん、サーファお兄ちゃんはすごい速度で走り始めた。ドラゴンだから？竜神様だから？だからこんなに早いの？ とりあえず、しつかり掘まつてないと風圧で飛ばされそうだ。

「H—デルフィア、しつかり掘まつてねー」「ウハハハハハハハハ

あわわ、風圧でしゃべりにくいく。今はとにかくしつかりと掘まつていたほうが多いな。

「大丈夫？ 町についたよ」

おー！ あまりの風圧に、いつの間にか意識が飛んでたみたいだよ。気がついたら町についてたっぽい。

「んわゆ……、へーわこ……」

ホントはまだ風圧の影響できついけど、でも心配はさせたくないからとりあえず大丈夫だと答えておくよ。

「まずは、落ち着ける場所に行くか。喫茶店系でいいだろ？ 行こう」

「Jの世界にも喫茶店はあるのか。ああ、まあ普通にあるか。うん、失言だった気にしないで。

そしてついで喫茶店。そこではまずお姉ちゃんがフードを脱ぐ。え？ そしたら私丸見えなんだけビ！？

「これはこれは、いらっしゃいませ、竜神様方。あら？ 今日は随分と小さなお客様まで。どうぞ、お席のほうへ」

……あれ？ 奇異の田で見られなかつた。山で初めて見た人間は思いつきり奇異の田で見てきたから、町の人間みんながそうなのかと思つたけど、違うのか。

って言うか、町の中でもお兄ちゃんたちは竜神として有名人なのね、実感した。私たちがこの喫茶店に入つてから、入るうとする人はいるけど、私たちを見て回れ右して帰つていくよ。

「とりあえず、エーテルフィアには深皿に何か甘いものを、俺たちはいつもやつな」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

いつもの？ お兄ちゃんたち何気に常連さん？

そう思つていると、私の田の前に何かが広げられた。お姉ちゃん、これ何？

「これがさつやホールフライアと話したお金だね。まずこれが一番小さなお金、鉛貨。これが10枚集まると次のお金、銅貨になる。で、銅貨を100枚で、銀貨。銀貨が100枚で金貨。金貨が10枚で晶貨になるの」

「ん？ へ？ えっと、ちょっと待って。

まず、一番小さなお金が、鉛貨で、それが10枚集まつたら銅貨にランクアップして、銅貨が100枚で銀貨になって、その銀貨が10枚で金貨、金貨が10枚で、一番上のお金の晶貨になるのか。よし、おっけい。

「ほり、一枚ずつ持つてござらん？ なくしたらいけないから、私たちの田の届かない場所に持つていかないとよろしくね？」

「うん、ありがとー！」

そうして一枚ずつ持つていくのだが、これは見た目の判断がかなり簡単だな。まず、第一に色が違う。

晶貨は水色といふか、少し透明感を帯びた感じの色で、その下の貨幣たちはそのままだ。金貨は金色で、銀貨は銀色、銅貨は銅色、といふか茶色で鉛貨は鉛色。でも、全部きれいだな。

「もついいかな？ なくしたら怒られちゃうから貰付けるよ  
「……え、あ、うん。ありがとー」

「いやいや、10歳にしてようやく初めてお金を見る」とことが出来たよ、私は10歳にして初めてお金を使う状況に来たよ。遅すぎじゃね？」

「お待たせしました。小さな竜神様にはこの近くで取れた果物のジュースをお持ちしました。気に入つていただけるとよいのですが……」

そうしてたら頼んだものが来たみたいだね、果実100%ジュースだね！

でも、知らないものは最初は怖いんだよね。というわけで、恐る恐る口を近づけ、舐めた。……美味しい。

ペチペチペチペチ。私が舌でジュースを掬つて飲む音があたりに響く。うん、これ美味しいよ。甘くて、何だか優しい味。

「気に入つていただけたようで何よりです。もっと飲まれたいのでしたら、まだありますので遠慮なく仰ってくださいね」

「んきゅー！」

ならば遠慮なく！ つていうか、ホントこれ美味しいわ。

「よつほど氣に入つたみたいだね」

「美味しそうに飲んでるもんね」

「エーデルフィア、可愛い」

だつて、美味しいもん。そういうば、お兄ちゃんたちは何を飲んでるの？ ねえ、一体何を飲んでるの？ ちょびっとちようだい？

「あー、あげてもいいんだけど、多分エーデルフィアには苦いよ？」

「シロップを入れても、多分まだ苦いよな」

「だろうね。ほら、論より証拠。飲んでじらん、これはシロップが入つてるから少しはマシだから」

サーファーお兄ちゃんはそう言つて自分の持つカップを傾けて私に

飲みやすこよにしてくれた。

つて、あれ？ この色、この匂い。 われつて「コーヒー」じゃ

ないか！！

確認のために、その液体に舌を伸ばす。 舌で掬つて飲む。「うん、やつぱりコーヒーだ。

久しぶりの味だー。でも、ちびちびドリップの口にはかなり苦いよ……。

「こわやー…………」

「だから言つたでしょ？ このトコロのジュースもう一杯もつ

てきてあげて」

「畏まりました」

もつ少し大きくなれば、懐かしきコーヒーの味も美味しく感じられるようになるかな？

前世の私つて、一応コーヒー大好きで殆ど毎日飲んでたのに、転生してからは無いと思つてたから全然飲んでないんだよね。 いろんな意味で、禁断症状出てたよ。

でも、その禁断症状はさつきの苦味で完全に吹つ飛んだ。これを美味しいと感じられるとしになるまでは「コーヒー」ではない。苦い。

そのためにも、早く大きくならなくちゃね。

教えて欲しいな（後書き）

ストックが尽きました（泣）

これからは一話出来次第更新となります。  
さすがに一作品毎日更新は辛いですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8690x/>

---

まさかの転生物語

2011年10月29日21時14分発行